資料１－３

日本製デジタルアーカイブの海外における利活用の現状と期待

江上敏哲
国際日本文化研究センター

2016.10.31
第5回デジタル・アーカイブの
連携に関する実務者協議会

江上敏哲（えがみとしのり）

国際日本文化研究センター図書館 司書
（資料課 資料利用係長）
egami-kyoto@sings.jp
egami@nichibun.ac.jp

著書『本棚の中のニッポン：海外の日本図書館と日本研究』（笠間書院, 2012）

- **海外の日本研究**
- **図書館の現状とニーズ**
- **日本からのサポート・情報発信**

国際日本文化研究センター

- 大学共同利用機関 人間文化研究機構
- 「日本文化に関する国際的・学術的・学際的な総合研究」
  「世界の日本研究者に対する研究協力・支援」
- 外国人研究者
  客員/外来・来訪　約50名/年
  留学生（総研大院生等）　約20名
- 図書館来館者（海外）　約300人/年

3

参考文献

- 江上敏哲.「情報発信を考えるヒント」.『本棚の中のニッポン：海外の日本図書館と日本研究』. 笠間書院, 2012, p.251-273.
- 江上敏哲.「「誰でも」とは誰か：デジタル・アーカイブのユーザを考える」.『デジタル・アーカイブとは何か：理論と実践』. 勉誠出版, 2015.6, p.27-47.
- 『公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」報告書 2』. JALプロジェクト2015「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」実行委員会, 2016. http://www.momat.go.jp/am/visit/library/jal2015contents_j/
- 江上敏哲.「イベントレポート(1)「アクセスの再定義：日本におけるアクセス、アーカイブ、著作権をめぐる諸問題」」.『人文情報学月報』. 2015.7, 48後編. http://www.dhii.jp/DHM/dhm48-2
- 飯野勝則.「ウェブスケールディスカバリと日本語コンテンツをめぐる諸課題：海外における日本研究の支援を踏まえて」.『カレントアウェアネス』. 2014.9, CA1827.
- Kamiya Nobutake, Naomi Yabe Magnussen.「Case study : CiNii's Japanese language bibliographies in Primo Discovery system : at Zurich and Oslo University Libraries」(EAJRS2015年次集会). 2015.9.

4

【本日のまとめ】

- あらゆる分野/種類/難易/地域/メディアの資料が対象。
- 日本資料が必要なのは、日本”専門”家だけではない。（研究の学際化・国際化）
- デジタルが不足している。海を越えない。
- 欧米・中韓とのデジタル格差がひろがる。
- 日本離れが止まらない。（退潮傾向、日本忌避）

5

【本日のまとめ】

- 「ここが”日本”のポータル」で客は来ない。
- ポータルのデータを“外”にさらす。
- ユーザが目にする“いつものところ”に送る。
- 国際的な他のポータル上に出す。
- ローマ字＆英語（多言語）対応が必要。
- ユーザ理解・ユーザ考察が先に必要。
  提供者・発信者の都合はその次。

6

ユーザ事例

- EAJS神戸
  （2016年9月）
  - 震災の記憶
  - 東アジア経済
  - 高齢化社会
  - 持ち家事情
  - 専門職の非正規雇用
  - 医薬品市場
  - 食物アレルギーと給食
  - ファッション雑誌
  - チアリーディング
  - 日系ボリビア人の運動会
  - 八重山諸島の雨乞い
  - 文化財行政

7

ユーザ事例

- 中国・博士課程留学生
  - 戦前の中国・台湾・朝鮮への修学旅行を研究
  - 地方の歴史ある高校の校史資料
  - 未整理資料→現地訪問・資料調査の交渉
- 中国・理系大学の講師
  - 岐阜市の交通政策と公共交通利用の変化を研究
  - 岐阜大学留学中に国際英文雑誌に論文を掲載
  - 岐阜市の行政資料を多数引用
  - 例：「The Third Urban Master Plan for Gifu City」
    →『岐阜市第三次総合計画：21世紀への架け橋』？

8

ユーザ事例

- 日文研図書館　訪問利用者
  - 幕末明治期の工場・機械技術関連の史料
    該当分野の研究書　（日本語）
  - メール・会話はすべて英語（日本語不可）
- アメリカの学部学生
  - 日本の歴史学の講義は、英語
  - マンガ・アニメ講義を他大学で聴講
  - 自分の大学には日本専門の司書がいない
    →日本資料に関するサポートが得られない

9

ユーザ事例

- ハーバード大学での日本映像資料の活用
  - テレビ番組は教材として有用だが、現状無理
  - DVD（英語付き）があっても売ってもらえない
  - 英語字幕が少ない→グレーなものを買う？
  - 日本の動画サイトが海外からアクセス不可
  - 例：韓国の国立フィルムアーカイブ（KOFA）
    - ネット公開。政府が著作権処理。
    - 多様なプラットフォームに対応（YouTubeなど）。
    - ペイパービューや定額プランを図書館で契約可。

10

【海外のユーザ像（まとめ）】

- 日本資料へのニーズはユニバーサル
- 研究内容/分野は多種多様
- あらゆる種類/地域/メディアの資料が対象
- コストがかかる（距離・経費・敷居の高さ）
- 日本研究はマイナーで、支援は少ない
- 研究・教育の主戦場は英語（＞母語・日本語）
- 日本語能力/日本リテラシーはまちまち
- ニーズもまちまち
  「有料でもいい」／「日本語でもいい」
  ⇔「高額は無理」／「英語なしは不便」
- 日本資料が必要なのは、日本”専門”家だけではない

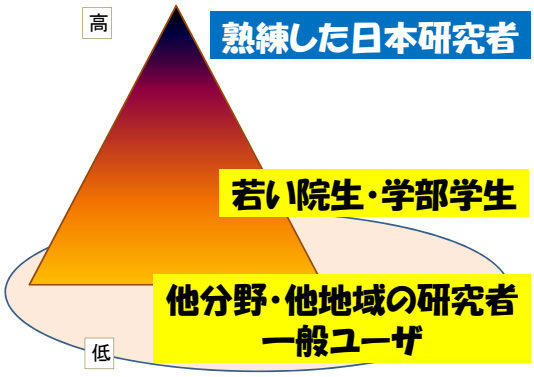
11

研究の学際化・国際化/共同研究

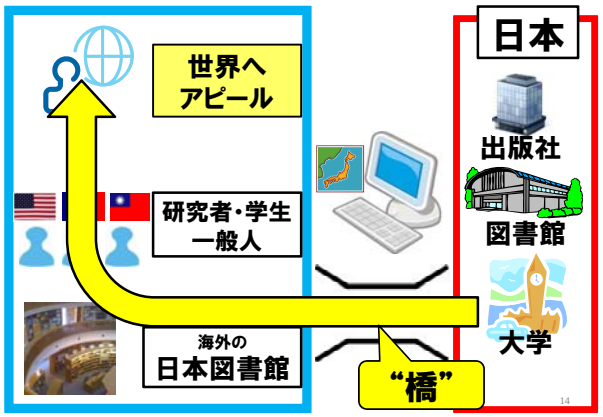
- 日本資料が必要なのは、
  日本”専門”家だけではない
  - アジア美術史学の院生
    →中国・台湾を専門に、日本・韓国も扱う
  - 政治学、経済学、都市工学、福祉・高齢化
    →各分野で、日本“も”扱う
  - 共同研究（学際/国際）
    →他分野・他地域研究者が、日本“も”扱う

12

“日本リテラシー”



13



14

日本のデジタルアーカイブと海外のユーザ

- (例)東寺百合文書web
  日本を専門としない歴史学・宗教学・経済学研究者に届くか？
  - Googleなどサーチエンジンで見つかる
  - 目録・索引データベースを検索できる
  - クリエイティブ・コモンズ(国際ルール)の採用
  - 英文提供に課題あり
    →機械翻訳や多言語検索が可能

15

【日本が直面する課題(まとめ)】

- 日本離れが止まらない(退潮傾向)
- 深刻なデジタル不足
- デジタルが海を越えない
- ユーザのニーズにかなっていない
- ユーザの目に触れない、知られていない

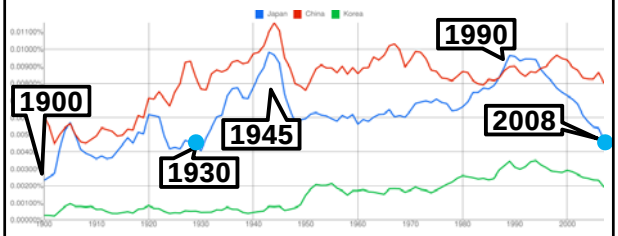
16

- 日本離れが止まらない(退潮傾向)
  - 日本研究の統廃合、研究者・学習者数の減少
  - 日本の低迷、欧米の不況、人文学の低調
  - 他地域の台頭(中国、韓国、インド、中東等)
  - →日本を研究しても評価されない
- 深刻なデジタル不足
  - 研究・学習のデジタル環境整備は世界的に進行
  - 日本研究だけ、紙に頼るしかない
  - 欧米・中韓とのデジタル格差がひろがる
  - 学生・院生、他分野研究者らが日本を忌避する

17

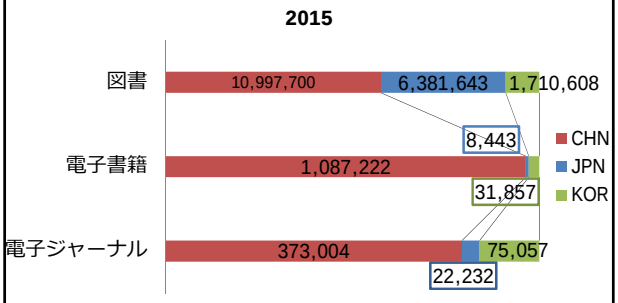
日本研究の“退潮傾向”

Google Booksでの ■Japan 登場頻度
(Google Books Ngram viewer)



18

北米・東アジア図書館での図書・電子書籍・電子ジャーナル所蔵数



『CEAL Statistics』から作成

- デジタルが海を越えない
  - デジタル化しただけで、ネットでアクセスさせない
  - 権利等の理由で、アクセス/契約できない
  - 日本の業者が海外契約を拒む/対応しない
  - 高額すぎる/煩雑すぎる/非協力的
  - NDLデジタルコレクション送信サービス
    →海外配信不可＋ILL停止
- ユーザのニーズにかなっていない
  - コピー、ダウンロード、メール送信不可
  - 専用ソフトが必要、汎用性がない
  - 本文・索引が検索不可（画像・ブラウジングのみ）

20

- ユーザの目に触れない、知られていない
  - ネット公開しただけ。discoverability・visibilityが低い
  - 「来館して、説明を聞いて初めて知った」（日本美術司書研修参加者のコメント）
  - そのサイトに行かなければ見つからない
    （例）日文研データベースの人気の差
  - ディスカバリ・システムに対応していない
    （例）「枕草子」「夏目漱石」で検索すると中国語コンテンツが上位にヒットする。
  - 国際的ポータルに収録されていない
    （例）Artstor（美術教育サイト）収録の日本美術作品は、海外所蔵品のみ（日本から参加・提供なし）

21

ポータルをどうするか

- 「ここが”日本”のポータルです」で客は来ない
  ←日本研究が退潮傾向にある
  ←研究の学際化・国際化（他分野研究者等）
- ポータルのデータを“外”にさらす
  - ユーザが目にする“いつものところ”に届ける
    （Google、ディスカバリ、他のwebサービス　等）
  - 国際的な他のポータル上に出す
    （Europeanaとの横断・連携検索　等）
  - 在外日本資料との横断・統合検索
  - セレンディピティの増加をはかる
  →「発信」からメインストリームへの「合流」へ

22

- ユーザが普段見ているところに届ける
- ユーザの視界に入るようにする
- ユーザの情報行動の路上に露出させる
  ↑

ユーザ理解・ユーザ考察が先に必要

（提供者・発信者の都合はその次）

23

言語と翻訳の問題をどうするか

- 言語的な対応
  - インタフェース・ヘルプ類の、英語対応
  - メタデータの、英語対応/ローマ字対応
  - コンテンツの、英語対応/ローマ字対応
- 意味・文脈の“翻訳”＝わかりやすさを目指す
  - （例）Visualizing Cultures@MIT
  - オープンアクセス論文（日/英）とのリンク
  - 他のデータベース・レファレンスツールやwikipediaとのリンク
- 開発・運営に海外の協力者・協力機関を

24